

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン・エヴァンゲリオン 劇場版

今回のテーマ

喪失に伴うシンジの苦悩と再生、そしてそれに伴う心の成熟について考えていく

はじめに

新劇場版 Q でシンジは、目覚めた時に今まで親しい存在だと感じていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波も移行対象にならなくなっていると感じてしまう。支えを失い、孤独を感じていたシンジは、カヲルと呼ばれる謎の少年と出会い、ピアノの連弾を通じて心を通わせ、彼に心を開いていく。

カヲルと関わる中でシンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、一緒に街の様子を見に行く。しかしそこに広がる想像を絶する、破壊され尽くした光景にシンジは言葉を失ってしまう。シンジ自身がニアサードインパクトを起こ

したことをカヲルに静かに告げられ、シンジは取り乱し、再び心を閉ざしてしまう。

その後、カヲルの提案でエヴァと一緒に乗り、槍を抜くことになったが、そのカヲルの提案はシンジの自己愛的殻を破り、他責的で迫害的な妄想分裂ポジションの心性から自責的で贖罪を伴う抑うつポジションへの移行をスムーズに行わせようとする彼のシンジへの優しさの様に考えられる。しかし自己愛的殻に閉じこもり周囲を迫害的に捉えていたシンジは自己愛的な殻を破ることなく、カヲルを理想の対象と考え、躁的防衛をとる。途中、槍の異変に気づき、カヲルは一旦槍を抜く作戦実行を躊躇（ためら）うが、躁的になっているシンジはその忠告を聞かず、槍を引き抜いてしまう。

しかしそれがフォースインパクトを引き金をひいてしまう。世界が崩壊していく様を目の当たりにし、シンジは自分が、万能空想なかで起こしてしまったこと、これまで述べてきた様に妄想分裂ポジションの中にとどまり、槍を引き抜いてしまったが、そこでようやく自分の犯した過ちに気がつき、その現実を直面し苦悩してしまう。自身がまた過ちを犯してしまったことに気づき、カヲルというそのとき無二の親友をも喪失してしまう。

シンジは自分の犯してしまった過ちや喪失（カヲルは良い対象ではなく使徒だったこと）を受け止めきれず、一方で再び退行していくこともできず、妄想分裂ポジション、抑うつポジションどちらの心性にもいくことができず、身動きが取れず、側からみてなにかもぬけの殻のような状態になってしまう。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いているように感じられる。

1. 思春期における青年期に至る過程（Adolescence Process）について

心身が成長し、大人のような体つきになり、二次性徴とともに色々な欲望が出てくる。今までの学童期に自身が調和が保たれていると感じ、慣れ親しんできた価値観がひっくり返され、社会的、家庭的秩序がある意味崩壊していくような感覚を抱き、色々なことに幻滅し、自身のこれまでの生き方（大人達の言うことに従う良い子）が何だったのかと突きつけられる思いに囚われる。

そして彼らの多くが出来る限り避けようと努める内的葛藤や不安が刺激される。しかしこの体験を、回避しようとし、考えないようにし、**色々と刹那的に**

行動することで、なかったことのようにする。この心の動きを 思考を回避する心の動き（Anti-thinking process）という。それは抑うつポジションを受け入れられない、彼らの妄想分裂ポジションの心性に基づく行動と考えられる。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつの体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

→シン・エヴァンゲリオン 劇場版（以下 シン・エヴァと略）の冒頭のシンジ

は③の段階にある様に感じられる。

2. シンジが目覚めた時、周囲の状況はどのような反応であったか？

(Qと同じテーマ)

シンジはアスカたちと一緒に赤い大地を彷徨っていたが、全身防護服姿の人たちに保護される。シンジが目覚めると犬は人に慣れた様子で嬉しそうに吠え、幼児は無邪気に好奇心を抱いてみている。そして白衣姿のトウジが心配した様に接し、周囲の人々もシンジを暖かく迎え入れる。

そして周囲の人たちトウジ、委員長、彼らの娘ツバメたちのやりとりは和やかで、アットホームな雰囲気がある。そこはQの冒頭部の鈴原サクラが未確認生物の様な対応をして、ミサトをはじめ周囲のWILLEの人たちの殺伐とした雰囲気とは対照的である。

そしてトウジの家では皆が食事を食べたり、お酒を飲んだり和気藹々(わきあいあい)としているが、シンジは部屋の片隅で、一人離れていた状態で両膝を抱えたままうずくまっている。しかし皆、シンジの存在に気にかけている。

→この点も対照的である。QではシンジがWILLEの人々と関わろうとしてい

るが、「みそっかす」扱いをされ、孤立しているのに対して、シン・エヴァではシンジを暖かく迎え入れているのかかわらずシンジは自ら距離をとって殻に閉じこもっている。

その中でトウジの義父が怒り出す

義父「シンジ君！ 無口はいい。だが出された飯は食え。それが礼儀だ！」

トウジ「まあ、オヤジさん。無理に飯に誘ったワシもいかんかった。今日はそつととったってえや」

義父「しかしトウジ君。これだけ貴重な飯をもらって一口も食わんとは、失礼にも程がある。なあシンジ君！」

委員長「お父さん、ツバメが起きるわよ。さ、後片付けして、布団敷きましょ。

ほらあなた、そっくりさんと碓君の分も」

ケンスケ「いや、碇は俺が引き受けるよ。その方がよさそうだ」

【考察】

色々な点が Q と対比して描かれているように感じられる。どちらもシンジの孤立が描かれているが、Q では周囲が迫害的に描かれ、シンジが排除されている様に描かれているのに対して、シン・エヴァでは周囲はシンジに対して受容的だが、シンジ自ら距離をとり、孤立している様に描かれている。

ここで、Q からシン・エヴァに変わる過程でシンジの心性は妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安に変化している様に感じられる。

妄想・分裂ポジションの迫害不安：外の誰か、何かしらの脅かし

→他者への恐怖であり、自身の内的な心の痛みではない 激しい崩壊の恐怖

抑うつ不安：悲哀、罪悪感、無価値、絶望、無力

→対象の喪失に伴う感情であり、対象喪失の事態に自分が関与した気づき

抑うつ不安が生じる背景には、自身の不完全さの感覚がある、それは自分の限界を知る感覚であり、万能感、万能空想の放棄→そこに悲嘆、無価値観、絶望感が生まれる。

この取り巻く世界をシンジの心の世界を投影したものと捉えたとき、迫害から受容に大きく変わっている。けれどもシンジは（自責の念や贖罪の念を抱き苦しみがいている）その中でどの様に振る舞えばいいのか解らず、閉じこもっている様に感じられる。

シン・エヴァにおけるシンジはその抑うつ感情に苛まれ、それゆえ、身動き取れなくなっている様に感じられる。しかし周囲の人々はシンジに対して受容的である。トウジの義父は怒り出すが、それは迎え入れようとしているにも関わらず反応しようとしなない怒りであり、Q の WILLE の人々の排除する感じとは違っている。そしてシンジ自身もこれまでと違って受容的であるという様に感じ初めているように感じられる。それはとりもなおさず、抑うつポジションへの過渡期の様にも感じられる。

以下のケンスケの言葉が象徴的である。

「意外だったろ。トウジと委員長が結婚したのは。中学のときはケンカばかりしてたもんな。まあきっかけは、ニアサードインパクト。その後の苦労が二人の縁結びだ」

「碓、ニアサーも悪いことばかりじゃない」

1) シンジが覚醒後、アスカとの初めての対面 (Qと同じテーマ)

トウジの家庭の中に溶け込めないシンジをケンスケが引き取り、ケンスケ家に招かれ、シンジがその建物の中に入るとアスカが裸の姿で水を飲んでいて、

アスカ「ふん、私の裸よ。ちっとは赤面して感激したらどうなの？」

シンジは硬直したまま何も言わない。アスカは柄杓を水瓶の蓋に叩きつけて、吐き捨てるように言う。

アスカ「ったく！ ケンケンもこんな鬱陶しいヤツ拾ってきて物好きね」

ケンスケが裏口から戻った。アスカは仁王立ちで裸を隠そうともしない。

ケンスケ「ただいま。ああ、先客だ。しばらくうちにいると思う。諸事情あって式波は村には顔を出せないんだ」

アスカ「別に、リリンが多くて鬱陶しいだけよ」

その時、シンジはアスカの首に巻かれた黒い帯に気づき、カヲルが亡くなった
ときのことを思い出す。

シンジ「うっ！ うはっ、うええっ」

シンジはその場で嘔吐し、うずくまる。

アスカ「D S S チョーカーにだけ反応ありか」

アスカ「ケンケンそいつを甘やかし過ぎ。そんなの自分で拭かせなさいよ」

ケンスケ「碇は今、食べないし、自分から何もできない。よほど辛いことがあつ
たんだろう」

ケンスケは、手を汚すことにも苦勞を見せない態度で、淡々とシンジが吐いた
ものを拭いていく。

アスカ「そんなのいつものことじゃない。そうやって心を閉じて誰も見ない。こ

いつの常套手段でしょ。放っときゃいいのよ。どうせ生きたくもないけど、死にたくもないってだけなんだから」

ケンスケ「碓、今はそれでいい。こうして再開したのも、何かの縁だ。好きなだけ頼ってくれ。友達だろ」

ケンスケ「俺は碓が生きていてくれて嬉しいよ」

【考察】

躁的防衛で再びインパクトを起こし、トウジ、ケンスケを始め、市井の人々は大変な被害を被ったが、Q と違って皆、シンジに対して非常に受容的である。

その中でシンジに激しい陰性感情をぶつけてきたのはアスカである。それは市井の人々の抱く怒りの代弁の様にも感じられる。しかしその思いをケンスケは暖かく包み込んでいる。その様は周囲の人々が愛と憎しみの葛藤を抱き、愛の中に憎しみの感情を収める心の動きが起きている様に感じられる。まさに抑うつポジションの心性が起きている。トウジ、ケンスケたちが大人の姿になって登場してくるのはなにか象徴的である（成熟の象徴）

一方で、シンジの視点で見たときに、これまでシンジは周囲に対して迫害的に

感じており、心を閉ざしてきたものと考えられる。シンジが閉ざしていることは変わらないが（このシーンでは身体的にも身をかがめ殻に閉じこもっている）、シンジに対して周囲の人々が思いやりの心を持って接している様に、シンジは感じているのではないかと考えられる。

外見状は変わらないが、シンジの心が変化している様にも感じられる。

→その後、綾波（そっくりさん）が市井の人々との関わりが描かれていく。

綾波をシンジの写し鏡と捉えたとき、それは今までとは違った、新しいものを取り入れ、再建の段階にシンジの心は進みつつあるのではないかと考えられる。つまりその後の綾波の変化はシンジの心の変化を表している様に感じられる。

3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変わったか？

シンジがうずくまって殻に閉じこもる一方で、綾波は市井の人々と関わり色々なことを素朴に尋ねていき、徐々に新たな発見をしていく。

1) 委員長（ヒカリ）が授乳をしているところで、綾波が色々尋ね、自分には授乳ができないことを知り困惑するシーン

綾波：分からない。綾波レイなら、どうするの？

委員長：あなたは、綾波さんとは違うんでしょ？ だったら、自分で思ったことをすればいいの

レイの瞳が見開かれた。今まで考えようとしなかった設問に、彼女はしばし無言になる。

綾波：違って、いいの？

2) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 1

「風呂って不思議。LCLと違って、ポカポカする」

「私、命令がないのに生きてる。なぜ？」

3) 親子が、手を取り合う姿を見て綾波が問うシーン

綾波：あれは、なに？

委員長：そうね、仲良くなるためのおまじない

そう言うと委員長はそっと右手を差し出し、綾波は右手を、そこに重ねる。

4) 畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン 2

綾波：私の名前？

人々1：うん。いつまでも“そっくりさん、”というわけにもいかんからねえ

人々2：先生の話やと、自分の名前を忘れとるそうやけど、じゃったら自分で新しく付けたらどうなの

綾波：名前、付けていいの？

【考察】

綾波は色々な集落の人々に色々なことを尋ね、彼ら彼女らの言葉一つ一つに心揺さぶられていくが、それだけ彼女を取り巻く外界が新鮮に感じられ、新しい発見の連続であるかの様に描かれている。それは今まで受け身的（超自我に支配

されていたともいうべきか?)であった綾波が徐々に主体的、能動的になり、積極的に外界の刺激を取り入れようとしているように感じられる。1)から4)に抱えて時系列的に綾波の言動を列挙したが、分離个体化し、徐々に他者と関わりを持ち、自身に主体性が立ち上がっていく様を描いているように感じられる。とりわけ4)の名前をつけるということは自身のアイデンティを持つことであり、確固とした自我を持ち、主体性の立ち上がりを象徴しているように感じられる。

(cf 千と千尋の神隠し)

そしてこの綾波の心の成長に関して、綾波とシンジを表裏一体と考えたとき、シンジの心の成長を描いているとも考えられる。また、綾波の心の成長の一方で、うずくまったシンジと一緒にいて、常に苛立ちを隠せないアスカのシーンは対照的である。

そして心が成熟した綾波とシンジが交流し、シンジに心の変化が生じる。

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

1) まず、綾波とシンジの対話

綾波：碓君はなぜ、村に戻らないの？

綾波：碓君も、ここで何もしてない。あなたもこの村を守る人なの？

シンジは微動だにせず膝を抱えて座っている。そしてなにか今まで貯めていた思いを吐き出すかの様に激しい口調でいう。

シンジ：守ってなんかいない。何もかも僕が壊したんだ。もう何もしたくない。

話もしたくないんだ。もう誰も来ないでよ！ 僕なんか、放っておいてほしいのに！

シンジ：なんでみんな、こんなに優しいんだよ

綾波：碓君が好きだから

シンジは、はっと息を呑んでレイの方へ振り返った。

綾波：ありがとう。話をしてくれて。これ、仲良くなるための、おまじない

綾波はシンジを見つめ、そっと右手を差し出す。シンジは堪えきれずに、嗚咽して泣き出す。

【考察】

ここは心が成長した綾波がシンジを包み込んでいる。シン・エヴァではシンジを取り巻く人々は、皆、彼に対して温かく優しく接していたが、それゆえにシンジは自分が犯した罪は決して許されるものではないと考え、殻に閉じこもっていたように感じられる。けれども本当はシンジは自分のその苦しい思いを受けてめてほしいし、共有したいと感じていたように感じられる。

「誰も来ないでよ」「放っておいてほしい」と強く言ったシンジだが、自分の苦しみなんて、結局誰も受け止めてくれやしない、触れられて、これ以上傷つきたくないからこそ放った言葉であったと考えられる。

だからこそ綾波の言葉「碓君が好きだから」「ありがとう。話をしてくれて。」

という言葉は非常にシンジの心を揺さぶったのではないだろうか？

→シンジは心を閉ざすことをやめ、トウジやケンスケが暮らす生活に入り込んでいった。それはシンジが現実世界を受け入れ、今後立ち向かうであろうシンジのエディプス葛藤への第一歩を踏み出したとも考えられる。

2) シンジはケンスケに連れられて、ケンスケの父の墓参りをするシーン。

ケンスケ：ありがとう。朝から付き合ってくれて

ケンスケ：ニアサーを生き延びた親父が、まさか事故であっさり死ぬとは、その時はまるで思わなかったな。こんなことなら、ちゃんと話をして、酒でも飲んで、愚痴の一つも聞いたときゃよかったよ

ケンスケ：お前の親父は生きてるだろ？ 無駄と思っても一度は会って、きちんと話せよ。後悔するぞ

アスカ：そんなのこいつには重いわよ。あの碓ゲンドウじゃ

ケンスケ：しかし、親子だ。縁は残る

【考察】

ケンスケの言葉。ここでは次のテーマの導入として描かれているように感じられる。抑うつポジションへの心性を語る。そしてエディプス葛藤にシンジが向き合おうとする前振りのように感じられる。

ケンスケの父の墓でお参り→父を乗り越えて一人の成熟した大人になったケンスケの姿（父親殺しの象徴）

3) 綾波の喪失

綾波：おはよう

シンジ：おはよう。どうしたの、こんな朝早く

綾波：碓君に会いたかった

シンジ：これ

黒い音楽プレイヤーをシンジに差し出した。

シンジ：あ、ありがとう

シンジ：あの、頼まれていた名前なんだけど——綾波は綾波だ。他に思いつかない

綾波：ありがとう。名前、考えてくれて。それだけで嬉しい。ここじゃ生きられない。けど、ここが好き

シンジ：綾波？

綾波：好きって分かった。うれしい

シンジ：綾波、どうしたの？

綾波：稲刈り、やってみたかった

綾波：ツバメ、もっと抱っこしたかった

綾波：好きな人と、ずっと一緒にいたかった

綾波：さよなら

シンジ：綾波！

別れの言葉の直後、レイは息を引き取るように瞳を閉じ、綾波は爆発し、そこには LCL に濡れたプラグスーツのみがあり、シンジはそのプラグスーツを抱いて静かに泣き出す。

→綾波との対話後、綾波喪失　そこでシンジは再びエヴァに乗る決意を固める、

5. ヴインダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様変わったのか？

シンジはアスカに気絶させられ、目覚めたときは Q でシンジが目覚めたときに様に担当医務官の鈴原サクラが彼の様子を覗き込んだ。その後、「勝手に出て行って、あんだけ乗らんといてゆうとったエヴァに乗りくさって、アホ！　アホ！　碓さんのドアホ！」という様に、一方的にまくし立てる言いながら、途中

感極まり、シンジの胸にすがって泣き伏す。その様子は、Q の様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違っており、アスカに「女房か、あんたは」と呆れて言われた様に、サクラはシンジに対して愛憎まみえる心情を抱いていた様に感じられる。

このサクラのシンジへの関わりが象徴的だが、ヴィンダーの乗組員はミドリの様にあからさまに彼に対して憎しみを抱いている人もいる一方である程度シンジの存在を受け入れつつある様に感じられる。

そのやりとりをいくつかとりあげてみる。

1) ヴィンダーでアスカがマリへの再会のシーン

マリ「By the way, ワンコ君との進捗どうだったん？」

アスカ「べつに、興味ない」

マリ「ほう。年頃の男の子は眼中にないと」

携帯ゲームをしながら、アスカは突き放すように言う。

アスカ「ガキに必要なのは恋人じゃない。母親よ」

【考察】

これまで、この番組でシンジが現実を受け止め、心の成熟を進めていくには、生きていくにはシンジの心を受け止めていく母親の様な存在が必要であるということを何度か述べてきたが、アスカはそのことを話している様に感じられる。

そしてマリの問いにアスカは戸惑い、強がっているが、自分はシンジの心を母親の様にきちんと受け止められなかったと話している様にも感じられる。

そしてそこが、この3)の戦闘配備前にアスカがシンジに会いに行くシーンにつながってくるものと考えられる。

2)母の様な存在、それはミサトを初めとしたヴィンダーの人々がシンジの心を受け止めていくことが必要不可欠と考えられる。

そこでリツコとミサトのやりとりを取り上げる。

カジが残した保存した種を保管する倉庫でのリツコとミサトのやり取り

リツコ「――で、葛城艦長。仮称、碇シンジ君は、どうするの？ 息子と同じく、一生会わない気？」

ミサト「艦内保護で十分。私が面会する必要はないわ」

リツコ「DSS チョーカー、未装着のままでもいいのね？」

ミサト「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」

リツコ「ミサト、そうして格好つけてても、本心では戻ってきてくれたって喜んでるでしょ」

【考察】

ここで、ミサトはシンジに対してツレない対応をとっている。しかしこのやりとりをQのリツコの発言と対比していくと興味深い。

リツコはDSS チョーカーに関して「私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です。」と言っているが、ここでは不信・罰の象徴のDSS チョーカーを未装着のままの状況をリツコもミサトも受け入れている。それだけ二人ともシンジを受け入れようとする心性に変わ

っている。そしてミサトの「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意味がない」という言葉は、何か突き放した言い方ではあるが、シンジが妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行という心の成熟を陰ながら見守ろうという思いに他ならない。だからこそ最後のリツコの言葉が生きてくるのだと思う。

エヴァ劇場版・破において、スイカ畑でカジとシンジは次の様なやりとりをしている。

シンジ「これ確か……スイカですよ」

カジ「ああ。かわいいだろ？俺の趣味さ。何かを作る、何かを育てるってのはいいぞ。色んなことが見えるし、分かってくる。楽しいこととかな」

シンジ「辛い……こともでしょ」

カジ「辛いのはキライか？」

シンジ「好きじゃないです」

カジ「楽しいこと、見つけたかい？」

シンジ「……」

カジ「それもいいさ。けど、辛いことを知ってる人間の方が、それだけ人に優しくできる。それは弱さとは違うからな」

→カジはここで色々な情緒に向き合い受け止めていくことの大切さを伝えている。

3) 戦闘配置のためにアスカとマリがエヴァに乗り込む前にシンジに会いに行ったシーン。アスカは「ここは無垢の下ろし立てでしょ。死に装束だもの」と話していた様に戦闘で亡くなってしれないということで、最後に大切な人に出会っておきたいと思いシンジに会ったのだと考えられる。

アスカ「最後だから聞いておく。私があんたを殴ろうとした訳、分かった？」

シンジ「アスカが、3号機に乗っていた時、僕が何も決めなかったから。助けることも、殺すことも。自分で責任、負いたくなかったから」

アスカ「ちっとは成長したってわけね」

シンジ「最後だから言っておく。いつか食べたあんたの弁当、おいしかった。あのころはシンジのこと好きだったんだと思う。でも、私が先に大人になっちゃった。じゃ」

【考察】

このシーンではシンジの心の成熟が認められる。自身がその時なぜそうしてしまったのか？そしてその行動によってアスカを如何に傷つけてしまったのか？ということを理解している。それはシンジが抑うつポジションになり、現実を受け入れてきたからこそ発せられる言葉だと感じられる。

そしてアスカも成熟している様に感じる。最後のアスカの言葉で「大人になっちゃった。」という言葉は、シンジ・綾波（もういなくなってしまったが）との強い結びつきからの断念であり、それはエディプス葛藤を受け入れ（断念）、新たな道へ進もうとするアスカの心性が描かれている様に感じられる。そしてア

スカのこの言葉はシンジへの別れの言葉でもあるが、なにか今までの強がっていたアスカとは異なり、寂寥（せきりょう）の念が感じられる。

だからこそ、その後、マリはシンジに対して

マリ「よっ。君はよくやってる。偉いよ。碇シンジ君」

と言い、

アスカには

マリ「姫、ちっとはすっきりした？」と言い

アスカ「そうね。すっきりした」と返した様に感じられる。

Thrice Upon a Time

何度も時間が経過したことを示唆し、この表現は、時間の経過や物語の進展を強調する際に使用される。

「未来からのホットライン」という映画、反復強迫

→シンジを含め周囲の人々が抑うつポジションになり、反復強迫から抜け出し、

新しい世界を切り拓いてく心性を表しているようにも感じられる。

(thrice (三度) というのがエディプス葛藤を彷彿とさせる)

ここヴァンダーの乗組員はシンジ、アスカ、ミサトをはじめ、多くの人たちの心の成熟 (抑うつポジションへの移行) が起きている様に感じられる。

そして父と対峙し、倒し乗り越える様ためにヴァンダーの乗組員はネルフ本部にヤマト作戦を行い、総攻撃をしかける。

6. シンジとヴァンダーとの葛藤

ヴァンダーはヤマト作戦を行い、総攻撃を仕掛けるが、作戦はうまくいかず、アスカは式波のオリジナルによって 13 号機に連れ去られてしまう。そしてヴァンダーも制御システムを乗っ取られてしまう。そこにネブカドネザルの鍵を使い、人間を捨てたゲンドウがヴァンダーの前に訪れ、ヴァンダーの主機であった初号機を奪い、第 13 号機に乗り込みさらに深層の「マイナス宇宙」へと向かってゆく。それを見たシンジはエヴァに乗ってゲンドウを追うことをミサトに願い出る。

その後のシーン

シンジ「ミサトさん。僕が、エヴァ初号機に乗ります」

シンジ「綾波が消えた帰り道、加持さんに教えてもらった土の匂いがしたんだ。

ミサトさんが背負ってるものを、半分引き受けるよ」

ミサト「そのためには、碇ゲンドウと戦うことになるわよ」

シンジ「僕は、僕の落とし前をつけたい」

ミサトは無言でD S S チョーカーを差し出す。シンジは無言でそれを受け入れ、自ら首にはめる。

ミドリ「ちょっとやめてよ！ 冗談じゃない、まさかエヴァに乗せるつもりじゃないですよね」

ミドリ「こんなことになるんじゃないかと思ってた。艦長、この状況なら無条件発砲許可でしたよね」

ミドリ「疫病神！ あんたの起こしたニアサーのせいで、私たちの人生めちゃくちゃよ。全ての元凶、あんたら親子だけは絶対に許さない」

発砲が、された。それはシンジの足元をかすめて、鉄板を弾いた。しかしミドリの銃弾ではなかった。

ミドリ「はっ、サクラ！」

サクラ「碓シンジはエヴァには乗りません。碓さんはエヴァに乗って、みんなを不幸にして、自分自身も不幸になったんや。だからもう、碓さんはエヴァには乗らんのです」

シンジ「いえ、サクラさん。僕をエヴァに乗せてください」

サクラ「無茶言わんといて碓さん。怪我したら、もう乗らんで済みます。痛いですが、エヴァに乗るよりはマシですから、我慢してください！」

サクラがぎゅっと両目を瞑った。そして彼女の銃が乾いた破裂音を立てた。

ミサト「うっ」

リツコ「ミサト！」

サクラ「艦長！」

マコト「ミサトさん！」

ミサト「いいのよシンジ君。十四年前、あなたがエヴァ初号機に乗らなかったら、私たちはその時、既に滅んでいた。だから感謝しているの。その結果、ニアサーが起こされたとしても――。シンジ君のとった行動の責任は全て私にあります。現在も碇シンジは私、葛城ミサトの管理化にあり、これからの行動の責任を私が負うということです。私は今のシンジ君に全てを託してみたい」

サクラ「そうや！ 碇さんは私らを救ってくれた恩人や。けどうちらのお父ちゃんもニアサーで消えてもうたんやぞ！ 碇さんは恩人で仇なんや！ もうこうするしかないんや！」

ミドリ「もういい！ もういいよサクラ。もう明日生きてくことだけを考えよ

う。もう——何やの」

(中略)

ミサト「碓シンジ君。父親に息子ができることは、肩をたたか殺してあげることだけよ。加持の受け売りだけど」

シンジ「ミサトさん、加持リョウジ君に会ったよ」

ミサト「元気だった？」

シンジ「うん」

ミサト「そう。良かった」

シンジ「すごくいいやつだった。ちょっとしか話してないけど、僕は好きだよ」

ミサト「ありがとう。必ずサポートする。頼むわ、シンジ君」

シンジ「うん。ミサトさん、いってきます」

ミサト「行ってらっしゃい」

【考察】

ミサトは「碓ゲンドウと戦うことになるわよ」と言ったが、これこそがミサトとリツコとの対話で語られた「罪は自分の意志で償おうとしなければ、贖罪の意

味がない」と繋がってくる。序からこれまでシンジは色々な局面で現実から逃避する、一方で、「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ」と何度も言う様に現実に向き合うことに葛藤し、ずっと悩み苦しみ続けてきたと考えられる。ミサトの言葉はシンジ自身の現実に向き合う覚悟があるのか？と問いている。それに対しシンジは「僕は、僕の落とし前をつけたい」と覚悟を示し、自ら自分の首に DSS チョーカーをはめる。

その行為が通過儀礼としての首輪を授かった様に感じられる。そして首輪はキリスト教において聖職者の象徴であり、神の軛（くびき）を象徴するとも言われています。神の軛（くびき）とは、神の教えに従い、神に仕えることを意味する。聖職者は、首輪を着用することで、神への奉仕を誓っている。

そしてこのアニメで考えたとき、シンジ自身が自身の暴走をコントロールしようとする意思があるという印であり、以前は「自己の感情に飲み込まれ、覚醒リスクを抑えられない（Qのリツコの言葉）」形で暴走していた様に、シンジの心の中にある色々な内的対象がバラバラの状態であった（つまり妄想分裂ポジションの心性）。今のシンジは主体性を持ち、自分の責任のもとに置き、これまでの贖罪の念のなかで償い（抑うつポジションの心性）そしてエディプス葛藤に

向き合おうとしている（それが神の教えに従い、神に仕えるということにも感じられる）。このシーンでは彼の心の成長を描いているが、それを信じられないミドリとサクラがいる。しかしそれはシンジ自身の心のなかで、依然として自身の成長を阻み、成熟し、心が統合されようとしていくのを壊そうとしている部分はまだ若干残っている様にもみえる。

ミサトはサクラの銃弾を受け、怪我を負うが、ミサトが成長を阻もうとする攻撃性を受け止めた様にも感じられる。それは母親的とも感じられる。（そこでサクラがシンジに対して愛憎両価性を抱くのが印象的である。）そしてその後のシンジとミサトのやりとりが、暖かく何か旅立つ前の母と子の対話をしている様に感じられる。

→そしてシンジはマリの改 8 号機に同乗してゲンドウを追うためにマイナス宇宙へと突入し、その世界でゲンドウと対峙する。

7. シンジと父との対峙 父殺し

マイナス宇宙の中でシンジは父ゲンドウと対峙する。そこでシンジはゲンドウとぶつかり合う。その中でシンジとゲンドウはぶつかり合いながらも交流を

していく。それはシンジがこれまで触れることを怯え距離をとってきたものであり、シンジの殻であり、A-T フィールドである様に感じられる。

ゲンドウ「ほう。希望の槍カシウスと変わるか」

シンジ「もう、やめてよ父さん！ あ——」

ゲンドウ「駄目だ。私には、成すべきことがある！」

ゲンドウは有無を言わさぬ迫力で、初号機といっしょに時空の深部へと落ち込んでいく。そしてゲンドウとシンジはゴルゴダオブジェクトに衝突する。

1) ゴルゴダオブジェクトとは

ゲンドウが次の様に言っている。

人ではない何者かが、アダムスと六本の槍とともに神の世界をここに残した。私の妻、お前の母もここにいた。全ての始まり。約束の地。人の力ではどうにもならない。運命を変えることができる唯一の場所。

ゴルゴダの丘：イエス・キリストが十字架に磔にされたとされる場

→キリスト教徒にとって、苦しみや悲しみ、そして救いの象徴になっている。イエスがこの地で自らの命を捧げることで、人類の罪を贖い（あがない）、救いの道を開いたと信じられている。

2) 父と対峙しぶつかるシンジ

そこからゴルゴダオブジェクトは苦悩を引き受け、新しい運命を切り開く場という意味になっており、シンジはゲンドウによってシンジの追憶の世界へと誘われていく。

その目まぐるしく移り変わる世界、NERV 本部にあるこの物語のはじまりにでてきた、エヴァの格納庫から始まり、第3新東京都市、ミサトの家、2年A組の教室、綾波の部屋、ジオフロント、加持の畑。それらはこれまでのシンジの日常生活の世界なのだが、その中でシンジとゲンドウはエヴァを介してぶつかっていく。それはあたかも夢の世界の様である。

その世界の中でシンジはことごとくゲンドウのエヴァに打ち返されてしまい、全く敵わない。それはシンジがこれまで日常生活で抱いてきたエディプス葛藤の象徴の様にも感じられる。

シンジがゲンドウとぶつかる中であることに気が付く

シンジ「何だ？ 僕と同じ動きだ。やりづらい」

ゲンドウ「第十三のエヴァ。希望の初号機と対を成す、絶望の機体だ。互いに同調し、調律をしている。これも私に必要な儀式だ」

ゲンドウは一気に畳み掛ける。

シンジ「もうやめてよ父さん——ああっ」

シンジは強烈な突きを食らってよろめく。そして場面は、かつて自暴自棄の時に訪れた北の湖の廃墟に変わっていた。澄んだ湖面のほとりに倒壊した建物が積み上がっている。その白い漂白された場所で、たった一棟だけ残されたNERV 施設の跡地が背後に迫る。

ゲンドウ「無駄だ。お前のひ弱な力では、私を止めることは出来ない」

ゲンドウは威圧的な猛攻で初号機を押し出し、その施設の跡地へ向かって突き飛ばす。

横に倒れたシンジが見た光景は、かつてカヲルとピアノを弾いた場所だった。

その輝かしい記憶がシンジを立ち上がらせた。だがゲンドウは、その足元を槍で

すくい、第3村の丘へ投げ飛ばした。

ゲンドウ「まだ分からないか」

シンジ「うわー！」

ゲンドウ「力でも敵わない。まして暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではないからだ」

第3村に投げ飛ばされたシンジは、戦闘によって破壊された無残な光景を目撃する。トウジ、ケンスケ、綾波…そこで生きていた人々の顔が、シンジの頭をよぎる。

シンジの乗る初号機は立ち上がると、槍を地面に突き立てて、13号機と正面から向き合う。

ゲンドウ「そうだ。これは力で決することではない」

シンジ「うん。父さんと話がしたい」

【考察】

ここまでのシーンでゲンドウがのったエヴァとシンジがのったエヴァがぶつかあっているが、シンジは全然父ゲンドウがあまりにも強すぎて、彼に太刀打ち

できない。それはまさに中学生が大人である父に果敢に挑むが、力では全然敵わない様と似ている。確かにシンジの抱くエディプス葛藤を乗り越えるには、確かに父親を倒すことである。しかしゲンドウが「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と言っていた様に力で父を打ち負かすのは所詮、被支配—支配の立場が変わるだけである。それは、つまり肛門期の関係性のままなのである。

シンジはそれでも必死にゲンドウを倒そうと立ち向かってきたが、シンジがゲンドウによって第3村（3というのがミソ）に投げ飛ばされたときに、それまで触れ合ってきた人々のことを思い出す。そこでシンジは我に返って槍を突き立て、ゲンドウとの争いを止める。

ここまでシンジはゲンドウを悪い対象と捉えている。しかしゲンドウ自身が「希望の初号機と対を成す、絶望の機体」と言い、互いが同調して調律していると話している様に、良い対象と悪い対象は表裏一体なのである。そのことにシンジは気づかず、一心に攻撃し続け、跳ね返されることを続ける中（妄想分裂ポジションの心性）で、最終的に第3村を破壊してしまう。そこで自分が抱えられてきた良い対象達も傷つけてしまったのではないか？ということに気が付き、心を痛め、思いやりの心を持ち、争いを止める。まさに抑うつポジションへの移行

を表している。

シンジにとって大切なことは、対象を知り、現実を受け止めていくことである。それが社会への一歩を踏み出すことであり、エディプス葛藤を乗り越えていくことなのだと考える。そのことにシンジは気がつき、「うん。父さんと話がしたい」とシンジは言ったと考える。

W. ビオンの K.L.H について述べていきたいところ。

3) 父との対話

シンジ「父さん。父さんは、ここで何がしたいの？」

シンジは NERV 本部の司令室で、ゲンドウと向かい合っていた。シンジの立ち位置からゲンドウが席につく執務机はだいぶ離れている。

ゲンドウ「このゴルゴダオブジェクトでしか起こし得ない、アディショナルインパクトだ。それが、私の神殺しへの道へとつながる。そのために最後の二本の槍を、ここに届けた」

そしてゲンドウはアディショナルインパクトを起こす。

(中略)

シンジ「父さんは何を望むの？」

ゲンドウ「お前が選ばなかったA・T・フィールドの存在しない、全てが等しく
単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も
悲しみもない、浄化された魂だけの世界。そして、ユイと私が再び会える安らぎ
の世界だ」

シンジ「父さん、もうやめようよ」

ゲンドウ「なぜだ？ なぜシンジがここにいる？」

シンジ「父さんのことが知りたいから。寂しくても、いつも父さんに近づかない
ようにしていた。嫌われているのが、はっきりするのが怖かったんだ。でも、今
は知りたい。父さんのことを」

ゲンドウ「A・T・フィールド？ 人を捨てた、この私に？」

ゲンドウ「まさか、シンジを恐れているのか、この私が」

シンジは、携帯音楽プレイヤーを彼に差し出す。

シンジ「これは捨てるんじゃなくて、渡すものだったんだね。父さんに」

シンジ「僕と同じだったんだ。父さんも」

ゲンドウ「ああ、そうだ。ヘッドフォンが外界と私を断ち切ってくれる。無関心を装い、他人のノイズから私を守ってくれた。だが、ユイと出会い、私には必要がなくなった」

ゲンドウは、その後ゆっくりと内面を語り始める。

【考察】

父との争いの後にシンジは父の思いを知ろうとする。そこで父の目論見をしる。それは彼自身がアディショナルインパクトを起こし、神を殺そうと考えていること。そして自身が神となり、A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界、他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界と創造しようとしていることである。

一見、その世界は非常に理想的な世界のように聞こえるが、ミサトやリツコ達をはじめとした人々の考え（リツコ「私たちは、神に屈した補完計画による絶望のリセットではなく、希望のコンティニューを選びます」、ミサト「私は、神の力をも克服する人間の知恵と意志を信じます」）を無視し、寄せ付けようとならない独善的な考えであり、何か誇大妄想的でさえある。

そしてゲンドウを続けて次の様に言っている。「ユイと私が再び会える安らぎの世界だ」ゲンドウは彼の妻、ユイの喪失を受け入れられずに、ボウルビィの喪の作業の②思慕と探求・怒りと否認の段階（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）にとどまっており、そこで躁的防衛をしているようにも感じられる。これは新劇場版・破の最後でシンジが綾波の喪失を否認し、綾波を蘇らせ、彼女と一体になろうとする万能的な充足や歓喜の幻想にひたる心性となんら変わらないのである。

シンジは躁的心性で起こすことになったニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しめてしまったことを深く知っている。だからこそ「父さん、もうやめようよ。」と説いている。そして成熟したシンジはより父を深く知ろうとする。そこで父はA-Tフィールドを発動するが、ゲンドウがシンジと情緒的

に関わることを怯えていることが明らかになる。そしてシンジが「僕と同じだったんだ。父さんも」という。それは父と子の情緒が共有されていく瞬間のよう
に感じられる。その情緒に触発されるなかで父の過去が語られていく。

4) 父の内的世界 人類補完化計画とは？

シンジとゲンドウの対話の後にゲンドウの過去が語られていく。幼少期に人と関わるのが苦手、独りでいることを何よりも好んだこと、しかし大学時代にユイと知り合い、その考えが大きく変わる。ゲンドウが「私は生きていることが楽しいと感じることを知った。ユイだけが、ありのままの私を受け入れてくれた」と話していた様に、ユイがゲンドウの傷ついた心を初めて受け止めてくれる対象となり、その中で彼の心が彩りを持つようになる。ユイが母の様な存在だったとも考えられる（ゲンドウの内的世界はシンジの内的世界そのものであり、ユイにより、彼の心が彩りを持つ様になったのも、シンジが綾波と知り合ったときと似ているように感じられる）。しかしその幸せな時間も長くは続かず、ユイはいな

くなってしまう。ゲンドウはその時、初めて強い喪失の感情を抱き、それを受けきれないで苦しむこととなる。それが人類補完化計画に乗り出した背景である。

まさにユイの喪失が受け入れられないが故に自身が神となり、万能的に蘇らせようとする躁的心性である。

→人類補完化計画とは分離を否認した肛門期の固着の世界である。

しかしその世界がいまだに叶えられないでいる現実にゲンドウは苦悩する。

ゲンドウ「私は私の弱さゆえに、ユイに会えないのか。シンジ」

幼少のシンジ「その弱さを認めないからだと思うよ」

シンジ「ずっと分かっていたんだろう？ 父さん」

【考察】

シンジはこれまでの相次ぐ喪失を受け入れ、自分自身が犯した過ちの落とし前をつけようとしている。シンジがゲンドウに向けて言った言葉は、成熟したシンジがそれ以前の過去の自身に向けて言った言葉の様にも感じられる。それで

あるが故に非常に核心をついた発言であり、その言葉がこれまで父と子の中で受けつがれた心性の反復に楔をうつものになっている。まさにこれまでのことに落とし前のつける言葉であり、そこから父の贖罪のきっかけになったと考えられる。

→ミサトからガイウスの槍が届けられる。そして父の贖罪が始まる。

5) 父の贖罪

自身の死と引き換えにミサトが渡したガイウスの槍をシンジが受け取る。それを見たゲンドウはそこにシンジの成長を見出しつぶやく。

ゲンドウ「他人の死と想いを受け取れるとは、大人になったな、シンジ」

そして過去のシンジをゲンドウが回想する。

「ユイを再構成するためのマテリアルとして、シンジが必要か否なのか、最後まで分からなかった。願いを叶えるには、報いが伴う。子供は私への罰だと感じていた。子供に会わない、関わらないことが、私の贖罪だと思い込んでいた。その

方が子供のためにもなると信じていた」

ゲンドウは自分のやってきた行為を辿る。陰鬱な表情を見せるシンジ。父親の背中を見て泣きじゃくる幼い時のシンジ。駅の改札を通り、親類の元へ引き渡そうとしたシンジを、跪いて抱き寄せる。

ゲンドウ「すまなかった、シンジ」

そしてゲンドウがシンジを今のシンジ見たときつぶやく

ゲンドウ「そうか、そこにいたのか——ユイ」

【考察】

ゲンドウが他人を思い遣る成熟したシンジの姿をみて、自分がこれまで抱いてきたシンジと異なる存在なのだということに気が付くシーンである。ゲンドウはこれまでシンジを一人の人間ではなく、ユイに付随する存在としてしか捉えていなかったが、今、目の前にいるシンジはそういう存在ではない一人の成熟した人間なのだということに気がつき、ゲンドウ自身が未熟であるが故にシンジの気持ちを受け入れられなかった（シンジ（他人）の気持ちを思い遣ることができなかった）ことに自責の念を感じ、シンジに謝罪する。

それは父とシンジが深く交流し、ゲンドウ自身がこれまでの過去をふりかえり、喪失を受け入れられない自身に気づく一方で、シンジが成熟した存在になったことに気がつき、ゲンドウが妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行していると考えられる。その中でシンジという存在が自分とそしてユイと血の繋がった存在であることにゲンドウは気がつき、シンジの中にユイの存在を見出したのではないだろうか？

→そこで、シンジの父への思いは整理されたからか、父はトボトボと電車から降りていく。

一方で、電車は、ある種シンジが今後進むべき将来を象徴している様に感じられる。シンジは、父に受け入れられたい思いがある一方で、今まで圧倒的に強大な父親像に押しつぶされそうになっていたと考えられる。しかし父と深く交流する中で、シンジは父が自分と同じことを悩み苦悩する、愛おしい一人の人間なんだと気づいた。父親が電車から降りたということは、もうシンジにとって強大な自身を圧倒する様な父親ではないと感じられる様になったことを意味している様に感じられる。そしてそれこそが、シンジの心の中での父親殺しになったと考えられる。

8. アスカ、カヲル、綾波の魂の浄化

カヲル「碇ゲンドウ、彼が今回の補完の中心、円環の元だ。ここからは僕が引き継ぐよ、碇シンジ君。君は何を望むんだい？」

シンジ「僕はいいんだ。辛くても大丈夫だと思う。僕よりも、アスカやみんなを助けたい」

カヲル「そうだった、君はイマジナリーではなくリアリティーの中で、既に立ち直っていたんだね」

父との深い交流を経て、エディプス葛藤を乗り越え、心的にシンジは成熟したと考えられる。シンジは、その後、亡くなってしまったアスカ、カヲル、綾波の魂の救済の作業に乗り出そうとする。

それはシンジ自身にとって、父と同じ様に彼ら彼女らと深く情緒的に関わる中で、喪の作業を成し遂げていくことである様にかんじられる。

1) アスカの場合

アスカの過去が語られる。アスカはいつも周囲に対して強がっていたが、実際はシンジと同じ様に孤独な世界で、もがき苦しみ、誰かと深い交流を望んでいたか弱い少女であったことが明らかになっていく。

アスカ「パパは分からない。ママもいない。だから、誰も要らないのよ、アスカ」

アスカ「誰もいなくていいようにする。そうしないと辛いから。生きているのが苦しいから」

アスカ「エヴァに乗る」

歯を食いしばって、訓練を積み、実験に耐えるアスカの姿。

アスカ「人に嫌われても、悪口を言われても、エヴァに乗れば関係ない。他に私の価値なんてないもの」

アスカ「誰も必要としない、強い体と心を持つ。だから、私を褒めて！ 私を認めて！ 私に居場所を与えて！」

少女時代のアスカは、見知らぬ家族が幸せそうに笑っている光景を見た。駄々をこねて母親に抱かれたのはシンジだった。若かりし日のゲンドウとユイに守ら

れている。

アスカ「ほんとは寂しい。ほんとはただ、頭を撫でて欲しかっただけなの」

倒木の上で泣きじゃくる少女時代のアスカに、あのパペットと同じ格好をした着ぐるみが近づく。彼女の隣に座った着ぐるみは、幼い体で手袋をはめたまま涙を拭っているアスカの頭を撫でた。

着ぐるみが、おもむろに被り物を外した。それは相田ケンスケだった。

ケンスケ「いいんだ。アスカはアスカだ。それだけで十分さ」

アスカは涙に濡れた瞳を見開いた。

浜辺でアスカは覚醒する。アスカは横たわっていた。

アスカ「私、寝てた？」

アスカは夜空に向かって呟いた。そして傍らに座っているシンジに気づいた。

アスカ「バカシンジ」

シンジ「よかった。また会えて。これだけは伝えておきたかったんだ」

シンジは膝を抱えて、優しい眼差しでアスカを見下ろしていた。落ち着いた声で言う。

シンジ「ありがとう。僕を好きだと言ってくれて。僕も、アスカが好きだったよ」

アスカ「――」

アスカは身をよじって、シンジに背中を向けた。

シンジ「さよならアスカ。ケンスケによろしく」

【考察】

ここでアスカの過去を言及した自身の独白から始まる。その中でアスカは両親がいない天涯孤独な世界で生きてきたことが語られる。「誰もいなくていいようにする。そうしないと辛いから。生きているのが苦しいから」とアスカは語っているが、これはエヴァの序の冒頭部のシンジの心性と同じ様に傷つかない様に自己愛的な殻を作っていた。そして「お前バカア？」見下されない様にひたすら努力を重ねてきた。けれども本当は孤独で、自分の思いをきちんと受け止めて欲しかったのだと思う。しかしそれができず攻撃的な言葉を発し続けてしまう、まさにヤマアラシのジレンマであった。

エヴァの破でシンジとアスカが同じ布団で寝転んで、交わした言葉の中で、エヴァに乗る意味について語られたとき、シンジが

「父さんに褒めてほしいのかな？今日は、初めて褒めてくれたんだ。初めて褒められるのが嬉しいと思った。父さん、もう僕のこと認めてくれたのかな？ミサトさんの言ってた通りかもしれない」

と話しているが、それはアスカ自身も感じていたことであったと考えられる。深く同じ心情を感じていたからこそアスカはシンジに惹かれていったと考えられる。そして随所でアスカはいつかシンジに助けて欲しいと感じ続けたのだろう。そして成熟したシンジは「ありがとう。僕を好きだと言ってきて。僕も、アスカが好きだったよ」と話す。それはこれまでアスカがシンジに、深く自分の心を理解してくれる対象に言って欲しかった言葉であったと考えられる。そしてアスカの魂は浄化されたが、それと同時にシンジのアスカの喪失も受け入れたものと考えられる。

2) カヲルの場合

カヲルはシンジの幸せを考え行動してきたが、なぜ、その様に行動してきたのかが明らかにされる。

シンジ「思い出したよ。何度もここに来て君と会ってる」

カヲル「生命の書に名を連ねているからね。何度でも会うさ。僕は君だ。僕も君と同じなんだ。だから君に惹かれた。幸せにしたかったんだ」

シンジ「そう、カヲル君は父さんと似てるんだ。だから同じエヴァに乗っていたんだね」

NERV のピアノのある場所でシンジはカヲルと横に並んで、夜空を眺める。

カヲル「なんだかいつもと違うね、シンジ君。泣かないのかい？」

シンジ「うん。涙で救えるのは自分だけだ。僕が泣いても、他の誰も救えない。だから、もう泣かないよ」

カヲル「そうか、君はもう成長してたんだった。少し寂しいけど、それもいいね」

シンジ「カヲル君、第 13 号機、君のエヴァも処分しようと思う」

カヲル「うん。エヴァを捨てるか——。すまない。僕は君の幸せを誤解していた」

加持「ええ、それはあなたの幸せだったんです。渚司令」

加持「あなたはシンジ君を幸せにしたいんじゃない。それにより、あなたが幸せになりたかったんです」

カヲル「僕の存在を消せるのは真空崩壊だけだ。だから僕は、定められた円環の物語の中で、演じることを永遠に繰り返さなければならない」

幼きシンジ「仲良くなるおまじないだよ」

幼少の無垢な声でシンジが言い握手を求める。カヲルは涙を流して、その手を握り返した。

カヲル「相補性のある世界を望む。変わらないな、シンジ君は」

加持「だからこそ、あなたが彼を選び、生命の書に名を書き連ねた」

カヲル「ありがとう。リョウちゃんにも救われたよ」

加持「光栄です。渚司令」

カヲル「嫌だな、リョウちゃん。そろそろカヲルって呼んでよ」

加持「ふっ、まだお預けです。渚司令」

二人は海洋研究所の施設で海を見ている。

加持「渚とは海の陸の狭間。第一の使徒であり、第十三の使徒となる人類の狭間を紡ぐ、あなたらしい名前だ。あなたは十分に使命を果たした。あとは、彼に引き継いでもらってもいいでしょう」

加持「葛城と一緒に老後は畑仕事でもどうですか？」

カヲルは加持と一緒に畑を歩く。

カヲル「そうだね。それもいいね」

【考察】カヲルは「僕も君と同じなんだ。だから君に惹かれた。」言っており、後の方で加持は「あなたが幸せになりたかったんです」と言っている。この点からカヲルは自身の内的な心性をシンジに投影し、シンジを幸せすることで、自分の心を癒そうとしていた様に感じられる。まさにケアテイカーの心性である。その関係性の連鎖を断ち切るにはシンジが成熟し、自立し、シンジがそのカヲルの心を理解し、カヲルの心を受け入れることである。そこでシンジは「僕が泣いても、他の誰も救えない。だから、もう泣かないよ」と言ったのではないかと考えられる。その中でカヲルは「僕は、定められた円環の物語の中で、演じることを永遠に繰り返さなければならない」と話し、宿命の中で偽りの自己ともいうべき自身を演じ続け、取り残される孤独感を常に感じていたことが語られる。

そこで幼いシンジが現れ、「仲良くなるおまじないだよ」と言い手を繋ぐことを要求する。手を繋ぐということは、親密になることであり、共有し、相手を深く理解しようとする象徴である。そこにカヲルは「相補性のある世界を望む。変

わらないな、シンジ君は」と言って涙を流す。相補性とは自分と他者が相異なる部分を持っているが、お互い補い合う関係性である。カヲルはケアテイカーとして完全無欠な存在としてあろうとした（その点、神殺しをし、自身が神になろうとしたシンジの父に似ている。）。しかしカヲル自身も孤独な存在なのである。それをお互い受け入れ合いながら生きていく。そしてシンジにとってのカヲルの役割は終え、シンジ自身も彼の喪失を受け入れたと考えられる。

3) 綾波の場合

シンジ「残っているのは君だけだ、綾波」

綾波「私はここでいい」

シンジ「もう一人の君は、ここじゃない居場所を見つけた。アスカも戻ったら、

新しい居場所に気づくと思う」

綾波「エヴァに乗らない幸せ。碇君にそうして欲しかった」

シンジ「うん。だから、ここじゃない君の生き方もあるよ」

綾波「そう？」

シンジ「そうだ。僕もエヴァに乗らない生き方を選ぶよ。時間も世界も戻さない。
ただ、“エヴァがなくてもいい世界、に書き換えるだけだ。新しい、人が生きて
いける世界に」

二人の背景に走馬灯のように流れる長大な物語の断片が映し出された。

綾波「世界の新たな創生、ネオン・ジェネシス」

シンジ「うん。それに、あとでマリさんが迎えに来る。だから、安心して」

綾波「そう。分かった」

シンジ「碓君、ありがとう」

レイは右手を差し出し、シンジと握り合う。そしてその場から去う。シンジは
スタジオの中で最後の一人になった。

シンジ「やってみるよ。綾波」

ガイウスの槍を握りしめ、決意を固める。

シンジ「ネオン・ジェネシス」

【考察】

エヴァ自体、反復が一つのテーマになっているが、この新劇場版の序から新ま
でにおいても、当初、幼少期の母の喪失、そして父の育児放棄の中で、シンジは
殻に閉じこもる様に心を閉ざしていたが、抱えられる中で徐々に成熟していく
一方で、相次ぐ喪失の中で再び殻に閉じこもることを反復強迫の様に繰り返し
ていた。そこにいつもシンジの側にいたのは綾波だった。その中で綾波はエヴァ
に乗ることを巡って何度もシンジの苦労しものがく姿をくり返し見てきたと考え
られる。だからこそシンジの苦悩を少しでも和らげたいと「エヴァに乗らない幸
せ。碇君にそうして欲しかった」と言ったのだと思われる。シンジにとってエヴァ
に乗るということは、父親を巡る葛藤であり、それはエディプス葛藤に他なら
ない。そしてシンジ自身も「僕もエヴァに乗らない生き方を選ぶよ。」と決意表
明をしている。それは今まで父の幻影に苦しめられてきたシンジがその葛藤を
乗り越え、新しい生き方を模索していく決意表明の様にも感じられる。(そして
それは庵野監督自身のエヴァから脱していく決意表明の様にも感じられる。)

そして「ネオン・ジェネシス」の儀式が行われる。

9. さよなら、全てのエヴァンゲリオン

シンジが「ネオン・ジェネシス」を果たそうとするために自身のエヴァの首にガイウスの槍を刺そうとする直前に、誰かの手で差し止められ、シンジは母に抱えられる様子が描かれる。それからその槍からシンジを遠ざける様するシンジの背中を押す手が描かれる。

シンジが振り向くと綾波に似た女性の姿が映し出される。そこでシンジが気付く

シンジ「綾波？ いや、違う。そうか、この時のために、ずっと僕の中にいたんだね。母さん」

そしてエヴァが二つになり、一方が後ろから抱かれて、もう一方が両手を広げて槍を刺される準備をしている。その後シンジに父ゲンドウが背後から母を抱き母は幸福そうな笑みを浮かべている。

シンジ「やっと分かった。父さんは、母さんを見送りたいかったんだね。それが父さんの願った、神殺し」

次々とエヴァンゲリオンをガイウスの槍で次々と突き刺されていく。

シンジ「さようなら。全てのエヴァンゲリオン」

そしてそのことが新しい世界を切り開いていく始まりとなっていく。エヴァンゲリオンは様々な老若男女や動物に変わっていき、これまで真っ白だったものが様々な色の色彩を持ち始める。

【考察】

「エヴァに乗らない生き方」を選ぶということは、これまでの自分自身を壊していくことである。しかし自分そのものを壊していくのではなく、これまでとられてきた自身の内的世界に別れを告げていくことである。

それは両親、自分という、親子の関係のなかでシンジがこれまで抱いてきた内的世界であり、周囲に対して迫害的に捉え、傷つかない様に自分の殻に閉じこもっていた彼の心性（妄想分裂ポジション）である。

そのシンジが色々な人との出会いの中で、もがき苦しみながらも、心を開き、父と対峙し、エディプス葛藤を乗り越え、様々な喪失を受け入れ、人として成熟していく過程である。そしてそれは、綾波やアスカの喪失、およびその喪失に象徴される思春期の情緒的葛藤に伴う喪失を乗り越え、シンジが新たな人生を歩

み始めたとも考えられる。だからこそ、モノトーンだったいろいろな光景が多種多様でイキイキと彩りを持ったものとして目の前に溢れてきたのだと考えられる。

そのことこそが新劇場版エヴァで言われている「ネオン・ジェネシス」である様に感じられる。

そして、彼にとって必要のなくなったエヴァは次々と壊されていく。

今一度、これまでの新劇場版エヴァの作品を振り返りながら、その点について考えていきたいと思う。

シンジは幼少期に母が亡くなり、父にも捨てられ、不遇な環境で育ってきた。それ故に十全に養育者（象徴的に母とも言える）に抱えられた感覚を持たず、周りの世界を迫害的に捉え、自己愛的な殻に閉じこもっていた。

序で「エヴァンゲリオンは情緒的に深く関わる母のような存在。」と述べたが、エヴァ(EVA)を人類創生「アダムとイヴ」のイヴと考えると、イヴは神が「人が

独りでいるのは良くない。彼（アダム）に合う助ける者を造ろう。」と考え作り出された存在である。その様にシンジにとってエヴァは苦悩しながらも現実世界（外的世界に）に交流することを助ける存在であったのかもしれない。それはシンジにとって潜在空間における移行対象とも言えるかもしれない。そしてエヴァの搭乗員になったシンジは綾波と交流する。それによりシンジの思春期の心の成長と共にそれにともなう情緒的葛藤が始まりを告げる。

そして破においてシンジは綾波、アスカと交流し、和気藹々とした関係性を形成する様になっていった。しかしそれは長くは続かず、アスカ、綾波と次々に使徒により失ってしまう。シンジは相次ぐ喪失を受け入れられず、失った対象を救い出して助けたという幻想の中に浸ろうとし（妄想分裂ポジション）、そのある種、躁的心性のなかで起こした行動がニアサードインパクトを起こしてしまう。

シンジが躁状態によって引き起こしたニアサードインパクトは、周囲の人々に大きな苦難をもたらしました。しかし、その行動は、シンジが心の奥底に押し込めてきた悲しみや苦しみを無意識に吐き出したものであった。

シンジは Q において、これまで逃避してきた喪失に伴う心の痛みや悲しみと再び向き合うことになる。それにより彼は現実を直視し、苦悩し、もがき続けることになる。

カヲル出会い、彼とのピアノ連弾を通じて深い情緒的な交流が生まれ、カヲルを通して現実を直視し、苦しみを経験する。

しかし、シンジが現実を受け入れ、自身の喪失と罪を受け入れるまで、カヲルも彼の気持ちを理解し、待つことができなかった。シンジはカヲルの提案に盲信し、再び妄想分裂ポジションから躁的心性になり、破で綾波を助けようとした時と同じ過ちを繰り返してしまう。

同じ過ちを繰り返したシンジは支えがないと歩けないほど憔悴してしまい、再び閉じこもっていた。しかしシンジの心は以前の様な迫害感ではなく、自責の念や贖罪の念を抱き苦しみがいた。新劇場版では、成長したトウジやケンスケからシンジは見守られ、新しい綾波も第三村の人々との交流を経て、成熟し、再びシンジと関わることで、シンジは徐々に心を開いていく。そして村の人々と関わる中で再び WILLE に乗り込むことを決意し、父と対峙し、これまでシンジは

彼自身が抱く父親像に押しつぶされそうになっていたが、父を深く知る中で、父が自分と同じことを悩み苦悩する、愛おしい一人の人間なんだと気づき、エディプス葛藤を乗り越え、新しい人生を切り開いてく決意「ネオン・ジェネシス」を作り上げていく。

10. ～エピローグ～

ふと目覚めたとき、シンジは駅のホームのベンチに座っていた。

そして背後から誰かに目隠しされる。

マリ「だーれだ」

シンジ「胸の大きい、いい女」

マリ「御名答」

マリは首筋に鼻先を近づけた。

マリ「相変わらずいい匂い。大人の香りってやつ？」

シンジ「君こそ相変わらず可愛いよ」

マリ「ほほう、一端の口を利くようになっちって」

彼女は、そこに残っていたD S S チョーカーを自然な手付きで外すと、指先で

くるりと回してからジャケットのポケットに入れた。

マリ「さあ、行こう。シンジ君」

シンジは女性が差し伸べた手を握り返して、引いた。

シンジ「うん。行こう！」

二人は階段を駆け上がっていき、物語は終わる

【考察】

このシーンでシンジやエヴァを操作していた時とは少し歳を経ている。そして彼の服装も背広を着ており、成長し、成人になっている。

そこで、マリとのやりとりもシンジは「胸の大きい、いい女」というなど、以前の奥手なシンジとは思えないウィットの効いた発言をしている。だからこそマリは「大人の香り」と言い、それに対してもウィットに返し、ある種大人のやり取りをしている。

シンジのその姿は自信に溢れ、イキイキとしている。エヴァに乗ることを通じてエディプス葛藤を乗り越え、成熟した様を描いている様に考えられる。

そしてシンジはマリが手を繋いで「行こう」と言い階段を駆け上っていく。ま

さにシンジの新しい人生の始まりを象徴している終わり方である。

Q において、カヲルは亡くなる前に「シンジ君は安らぎと自分の場所を見つけなければいい。縁が君を導くだろう」と非常に抽象的で宗教的とも言える発言をした。このシーンこそが、シンジにとって真の安らぎと自分の場所のように考えられる。シンジはこれまで、良好な人間関係を築くことができず、自己愛的な殻に閉じこもっていたと考えられる。しかし、様々な人との出会いを通して成長し、自信に溢れ、生き生きとした姿を見せるようになった。これはまさに、カヲルの言葉が示唆していた「安らぎと自分の場所」を見つけるための第一歩と言えるだろう。

これでエヴァンゲリオンの考察は終わるが、このエヴァンゲリオン四部作はシンジの心に傷を負った思春期の人たちがどの様に心の成長を遂げていくのかを克明に描いた一大叙事詩と言っても過言でもない様に感じられる。